〈論　　文〉

オランダのユグノー印刷・出版業と「文芸共和国」

金　哲　雄

1．はじめに

「ヨーロッパの統合」いわれている欧州連合は、1951年のパリ条約によって設立された欧州石炭鉄鋼共同体に起源を持ち、2013年７月１日のクロアチアの加盟を含めて、28の主権国民国家で構成されている。この「ヨーロッパの統合」に関連して、クシシトフ・ポミアン著、松村剛訳『ヨーロッパとは何か　分裂と統合の1500年』（平凡社、1993年）は、その統合の歴史についてローマ帝国の崩壊以降のヨーロッパ文化史・政治史を総合的に見直し、そこに三つの統合の試みにアプローチしている。

『ヨーロッパとは何か－分裂と統合の1500年』において「第二のヨーロッパの統合」とみなされている「文芸共和国」（“La République des Lettres”）は、「文芸」に対する崇拝で結ばれており、すでに16世紀初頭から独自性を自覚した人々によってヨーロッパ各国に普及していた。17世紀末、1685年のナント勅令廃止によって追放されたユグノーは、オランダ、イギリス、ドイツ、スイスなどに移住した。フランスを離れたユグノーは、先行していた他国の移住者たちより数の上でまさっており、しかも教養人を相当数含んでいた。ユグノーの学者、企業家、銀行家、軍人たちは、亡命先のエリートにとけ込み、彼らにフランス語とフランス文化への好奇心をもたらした。他方、ユグノーの編集者や出版業者

は、とりわけオランダを起点として、ヨーロッパ規模での書物と定期刊行物の販売網を創設した。こうして彼らは、「文芸共和国」に基盤を与え、フランス語をヨーロッパのエリートの国際語にしたのである。彼らのなかに、ピエール・ベール（Pierre Bayle）がいた。ベールがフランス語の「文芸共和国」のなかで演じた役割は、ラテン語の「文芸共和国」でエラスムスが演じた役割に匹敵するものであり、ベールこそ、「文芸共和国」の理論家、立法者であった[1]。

ピエール・ベールの亡命地オランダは、彼が「巨大な難民の箱舟」と呼んでいるように、ありとあらゆる種類の避難民の避難場所となり、商工業上の利益をもたらすあらゆる者を受け入れた。16世紀および主として17世紀、大量のユグノーが移住してきたが、17世紀末におけるその数は５万5000から７万5000人にのぼると推定されている。とくに、ルイ14世の迫害から逃れようとするユグノーに対しては、このように商工業上、宗教上かなりの自由主義をとったオランダは、当然ながら門戸を解放し、彼らの移住を積極的に奨励したのであった。オランダへのユグノー移民たちは、ほとんどがノルマンディー、ブルターニュ、ホワトゥ、ギエンヌ出身であり、オランダ経済の発展に大きく貢献した[2]。とくに、「文芸共和国」に基盤を与えた、印刷・出版業の発展におけるユグノーの役割は顕著で、「ヨーロッパの統合」を考える際には注目に値するのである。

このような問題意識に立脚して、本稿では、オランダ経済、とくに印刷・出版業へのユグノーの貢献について論述するとともに、その経済的背景の下で、ユグノー、とくにピエール・ベールが「文芸共和国」のなかで果たした役割を明らかにしていきたい。それゆえ、本稿は、「ユグノーの経済史的研究」における構成部分のさらなる一つとして位置づけられるであろう。

1　クシシトフ・ポミアン著、松村剛訳『ヨーロッパとは何か　分裂と統合の1500年』（*L'Europe et ses nations*, 1990）平凡社、1993年、108～110ページ。

2　金哲雄『ユグノーの経済史的研究』ミネルヴァ書房、2003年、187～188ページ。

2．オランダにおけるユグノーの経済活動

オランダ（ネーデルランド連邦共和国、ネーデルランドの北部７州）は、ナント勅令廃止（1685年）当時に約100万人の人口を有し、約１世紀の間、著しい経済的繁栄の時期を享受していた。16世紀後半スペインからの独立後、オランダは、ヨーロッパにおける主要な海運国として急速に台頭し、商取引においてイギリス、フランスと競合していた。そして、アムステルダムは、西欧における国際商業の中心地としてアントワープに取って代わろうとしていた。オランダは、さらに独自の重商主義政策を展開し、外国貿易と金塊の輸出入においてほとんど完全な自由を保証していた。

オランダの諸都市は、数多くのユグノーを招こうとして競合していた。アムステルダムは1000戸の住居を建設し、移民に最低の賃貸料金でそれらを提供したといわれている[3]。そして、1681年の９月と10月には、アムステルダムにおけるすべての亡命者が自由に経済活動を行う権利、輸入税や他の市民税からの３年間の免除、生産手段を確保できるような無利子の借り入れ、彼らの生産物に対する安定した市場などを確保できるようにしたのであった。ロッテルダム、ライデン、ハーレム、そしてオランダにおける他のすべての都市がアムステルダムの例に従った[4]。それゆえに、新たな競争に直面したオランダの手工業者や労働者は、新来者に与えられた免税や他の特権にただちに憤慨し始め、彼ら自身、仕事をみつけることができないと不満をもらした。しかしながら、オランダの市長は、いかなるユグノーもフランスへ帰還することを喜ばなかった[5]。

3　Solomiac, "Le Refuge dans le pays de Vaud (1685-1680)," Bulletin de la société de l'histoire du protestantisme français,(IX, 1860), p.360.

4　Charles Weiss, *Histoire des Réfugiés Pretestants depuis la révocation de l' É dit de Nantes jusqu' à nos jours*, II ,(Paris, Charpentier, 1853), pp.6-7, pp.132-134.

5　Warren C. Scoville, *The Persecution of Huguenots and French Economic Development 1680-1720*,(Berkeley and Los Angeles, 1960), pp.342-343.

このように、きわめて多くの援助を受けてユグノー亡命者たちは、オランダの工業を促進させた。アムステルダムは、以前は海運業都市であったが、新たな製造業者や熟練手工業者を受け入れることになった。リヨンからは絹や糸の刺繍業者、花模様のついた織物やレースのデザイナー、サージやラシャ（粗製じゅうたん）の製造業者、金糸や銀糸の製糸業者、エクス・アン・プロヴァンスからはリンネル製造業者がアムステルダムへ移住してきた。オランダの市長たちは、彼らに大きな利益を約束することによって移住を奨励したのであった。それまでフランスから購入していた数多くの商品は、今やオランダにおいて亡命者によって製造されるようになった。また、ニームと同様のリボンも製造されたのであった[6]。

1685年前後にアムステルダムへのユグノー亡命者の多くは、トゥールやリヨンのタフタを模倣し、オランダの絹織物工業において巨大な成功を収めた。ライデンでは、1671年にはすでに約13万9000バレンの毛織物が生産されていたが、亡命ユグノーの毛織物業者の到来とともに製造が急速に増大した。また、ハーレムは、フランスのリンネル工業を導入することによっても繁栄した。織物工業とその類似の生産物に加えて、ノルマンディー出身のユグノー移民たちは、とくにロッテルダムにビーバなどの毛皮から帽子を製造する技術を移植することによって、ロッテルダムの帽子製造業を繁栄させた。製紙業やそれと密接な関連を持った印刷・出版業においても、オランダはユグノー亡命者によって大きな利益を受けたのであった[7]。(図１参照)。

オランダにおけるユグノーの経済活動に関する最近の研究成果として、David van Linden, "The Economy of Exile:Huguenot Migration from Dieppe to Rotterdam,1685-1700," Jane Mckee & Randolph Vigne, *The HUGUENOTS FRANCE,EXILE & DIASPORA*,,2013を挙げることができる。

6　Léon Dutil, "L'Industrie de la soie à Nîmes jusqu'en 1789", *Revue d'histoire moderne et contemporaine*, (X, 1908), p.321.

7　ユグノーの工業部門における役割について詳しくは、金哲雄前掲書、163～172ページ参照。

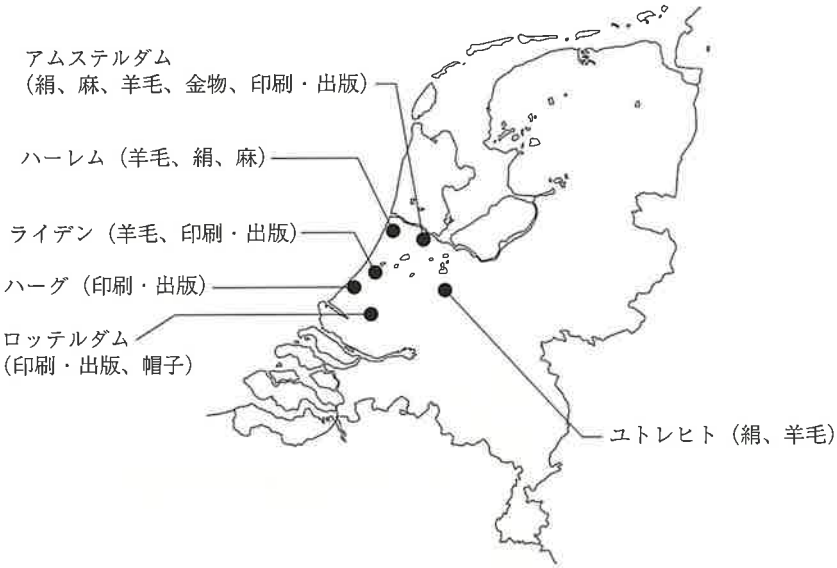

図１　オランダにおけるユグノーの主要な工業都市

ダヴィド・ヴァン・リンデンが対象にいているロッテルダムは、後に詳しく展開するピエール・ベールの亡命地でもある。リンデンによれば、ロッテルダムへのユグノー亡命者のうち、圧倒的多数はノルマンディー出身者（588名、全署名者の38％）であった。他のほとんどのユグノー亡命者は、フランスでほとんどのプロテスタントが居住していた「プロテスタント地域」（Prrotestant crescent）であるポワトゥ、アングモア、ギュイエンヌ北部のオーニスとサントンジュ、ガスコーニュ、南部のラングドックの出身者（486名、全署名者の31.4％）であった（図２参照）。結果として、ロッテルダムは、ユグノー移住のすべてを正確に反映しているわけではないが、より多数の移住傾向を示している優れたバロメーターとして役立つだろう。その亡命の圧倒的多数がノルマンディー出身者に注目するならば、そのほとんどがディエップとルーアン出身者であった。ノルマンディー出身者588名のうち、ルーアン出身者152名（25.9％）に対して、ディエップ出身者は306名と過半数（52.1％）を占めてい

る。このようなノルマンディー出身の圧倒的多数のユグノー亡命者の影響について、ノルマンディーの貴族イサック・デュモン（Isaac Dumont）は1687年に訪問した際、次のような感銘を受けていた。「この美しくて、大きな都市はほとんどフランス的になっている。というのも、ルーアンとディエップの居住者たちがそこに亡命地を求めたからである」[8]と。

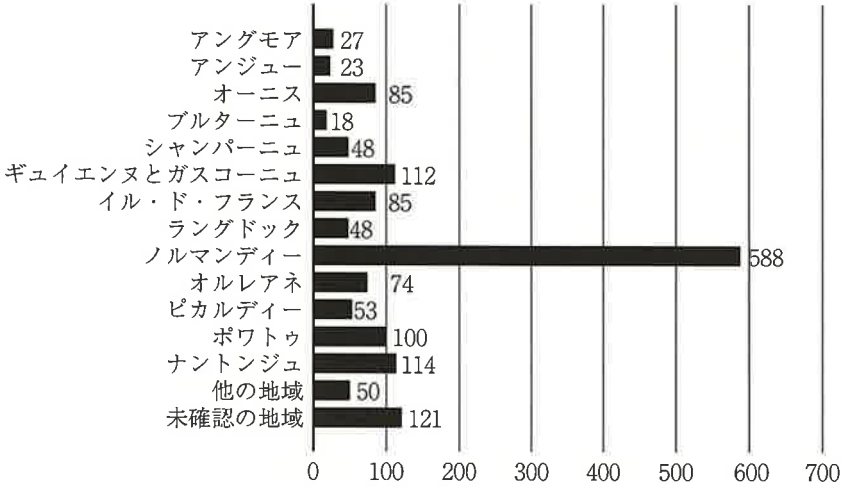

図２　ロッテルダムのワロン教会の予備調査記録簿におけるユグノー署名者の出身地（1686～1715年）（1546名）

（出所）David van Linden, "The Economy of Exile:Huguenot Migration from Dieppe to Rotterdam, 1685-1700," Jane Mckee＆Randolph Vigne, *The HUGUENOTS FRANCE, EXILE & DIASPORA*,, 2013, p.101.

ここでは、ユグノーの移住について重要な２つの問題が提起されている。一つは、ユグノーのなかに、なぜディエップを去る者もおれば、そのまま留まる

8　David van Linden, "The Economy of Exile:Huguenot Migration from Dieppe to Rotterdam, 1685-1700," Jane Mckee＆Randolph Vigne, *The HUGUENOTS FRANCE, EXILE & DIASPORA*,, 2013, p.102.

者がいたのか？そして二つめは、1685年直ちにほとんどのユグノーが亡命しなかったのか？その解答は、ほとんどのユグノーがフランスを去るのかそれとも留まるのかを考える上で、宗教が唯一の要因ではなかったとされる。確かに、宗教的ジレンマが信心深いユグノーの亡命を促すものであったが、しかし、移住の社会経済的機会もまた、その選択過程を決定する役割を果たした。お金、技能、そして情報ネットワークを持つユグノーは、より一層思い切って亡命を試みることができた。彼らはどこに、どのようにいくべきかを知っており、外国で生計を立てることができると確信していたのであった。移住者は伴う危険よりも利益を重視するので、移住というものは、合理的な費用便益の結果なのである。ユグノーの場合、旅行費用、逮捕の可能性、財政の不安定よりもその費用便益が重視されたのであった[9]。

これらの社会的ネットワークは、ことに遠距離の移住において決定的であった。というのは、例えば、ロッテルダムという遠距離の都市において雇用に関する情報は、収集が困難であったからである。そこでは、情報通の商人たちが最近のニュースを伝えることができた。あらかじめ外国に亡命しようとしてたユグノーもまた、これら都市のネットワークに頼っていた。ロッテルダムに到着した彼らのほとんどが、ロッテルダムと遠隔貿易に従事していた、まさにノルマンディーの諸都市の出身者であった。フランスは1640年代以降、ロッテルダムの商人たちに支配されていた、オランダの輸出における最大の海外市場であった。ロッテルダムの商人たちは、ディエップ、カーンなどの沿岸諸都市のみならず、ルーアンなどのセーヌ川沿いのノルマンディー諸港にニシン、チーズ、繊維、穀物、そしてスパイスを輸出していたのであった[10]。

ディエップを去ったユグノーの商人たちが、きわめて数多いこれらの職業グループに属していたことは驚きに値しない。ロッテルダムとの遠隔貿易に従事しながら、彼らは外国への亡命の可能性について最初に聞いていた。そして、彼らは商取引のネットワークを失わずに外国の港で容易に事業を開始できたの

9　Ibid., p.108.
10　Ibid., pp.108-109.

であった。同じことは、ディエップの船長、船員にも進行した。彼らはオランダの港に錨を下ろす際の情報をすばやく入手し、オランダ海軍に加わる十分な機会を得ていた。職人たちもまた、ディエップを去ろうとする、より多くの動機や機会を持っていた。オランダにおける諸都市の役員たちは1681年以降、都市経済の発展のため、ユグノーの職人たち、とくに帽子、絹、あるいはレースのような商品の取引に熟練した者たちを引きつけるのに熱心であった。例えば、ロッテルダム市長は、フランス・プロテスタントの事業再開を奨励するために、免税と補助金の約束を交わした。フランスでの宗教弾圧が激しくなればなるほど、ロッテルダムにおいてますます数多くの職人たちが、これらの約束と彼ら自身の技能によって利益を得たのであった[11]。

明らかに、情報ネットワークは、ディエップ居住のユグノーに移住を決心させるのに役割を果たしたのである。未亡人エベル（Hebert）とその家族が1685年にオランダへの到着に成功した際、そのニュースはディエップのプロテスタント・コミュニティーにすばやく伝わった。同年、ルーアン出身の帽子製造業者ダヴィッド・マロ（David Mallot）も、ロッテルダムで新たな帽子製造業を開始するために財政援助を求めていた。マロの仲間の移住者たちは、ロッテルダムから得られるユグノーに対する特権について彼に明らかに告げていたのであった[12]。

ユグノーのほとんどは、宗教上の自由を求めてフランスを去った、きわめて敬虔な単なるプロテスタントではなかった。確かに、宗教はユグノーにとって亡命を選択するまっさきの主要な理由だったが、しかし社会経済的機会もまた、移住を決断する決定的な役割を果たした。ユグノーを宗教的亡命者の役割において取り扱うよりもむしろ、多様なグループの移住者としてみなす方がより有益であろうとされている。彼らにとっては、経済的利点が外国への移住する動機付けになっていたのである[13]。

11　Ibid., p.109.
12　Ibid.
13　Ibid., pp.109-110.

近代初期のヨーロッパにおける賢明な移住者たちと同様に、ユグノーは、フランスの出国に援助の手を差し出してくれた親類、友人を頼って、雇用機会についての正確な情報を得ようと努力した。そして、彼らは家や家具を売り、十分なお金を持って外国で最初の数週間を過ごした。こうしてユグノーの商人、船員、そして職人たちは情報ネットワークへたやすく接近し、優れた技能を持って亡命先での商取引を継続することができた。亡命というレトリックにもかかわらず、その際に彼ら亡命者は、宗教の自由を享受しただけでなく、近代初期のヨーロッパにおける移住者たちに強いた、同様の社会経済的困難を克服したのであった[14]。

ロッテルダムにおける帽子製造業や印刷・出版業を含め、絹織物工業、リンネル工業、毛織物工業、帽子製造業、製紙業などは、ユグノーの亡命者がオランダに繁栄をもたらした主要な工業部門であった。それゆえ、フランスはそれらの損失、衰退を嘆かざるを得なかったのである。マックファーソン（Macpherson's *Annals of commerce,t.ll*, p.610.Edition de Londres, 1805）によれば、フランスの全収入は、1683年から1733年の50年間で7500万ポンド以上減少したという。ルイ14世治世下の後半期における不幸な戦争は、その衰退のもっとも大きな要因であったことには疑いはないが、ユグノーが一亡命先において移植した工業もまたその致命的な衰退の要因になったのである。彼によれば、絹織物、ビロード、毛織物、リンネルのフランスからオランダへの年間の輸出量は、60万ポンド（livre sterling）の減少であった。帽子は21万7000ポンド、ガラス、時計、家具は16万ポンド、レース、手袋、紙は26万ポンド、帆布、リンネル布、粗織布は16万5000ポンド、石鹸、サフラン粉（香料・染料）、パステル（青色染料）、蜂蜜、羊毛（紡績段階）は30万ポンドの減少をみたという。フランスからオランダへの輸出の減少量は、合計で170万2000ポンドにもなった。また、マックファーソンによれば、フランスからイギリスへの輸出の減少量も188万ポンドにもなったという。このように、オランダ、イギリス２国へのユグノー亡命者がフランスにもたらした年間の損失は、358万2000ポンドを下

14　Ibid., p.110.

らなかった[15]。これら貿易上の損失は、ロッテルダムへのユグノー商人の亡命も影響していたのであった。

事実、ユグノー亡命者がオランダの製造業に及ぼした影響に伴って、必然的にオランダの商業は繁栄したのであった。フランスにおけるプロテスタントに対する迫害により、オランダとフランスとの商取引は、強力な衝撃を受けることとなった。多数のフランスの商人たちは、海港の諸都市を去ってパリやその隣接地域に移住し、その弾圧に対する避難場所を見い出すようになった。ユグノーのなかには竜騎兵によって家が略奪され、商品が破壊されるか、あるいは没収された者もいた。そして、オランダの商人たちもこの災難に巻き込まれたのであった。ナント勅令廃止に関するニュースが伝えられた時、「アムステルダム証券取引所」（bourse d'Amsterdam）に対する衝撃があまりにも大きかったので、フランスの商人と単に取引しているという理由だけで、もっとも支払能力のある一家にさえも資本の供給が拒否された[16]。

フランスのラ・ロッシェル、ディエップ、ルーアン、リヨンなどの出身のもっとも富裕なユグノーがオランダへ逃亡したといわれる。彼らがかなりの量の貨幣資産を持参してアムステルダムに貸付資金を多く供給したので、利子率が低下することとなったという。アムステルダム銀行の預金および正貨予備金が1685年以降著しく増加し、1676～80年から1696～1700年まで預金量は約2.3倍、正貨予備金は約2.5倍に上昇した。この増加にナント勅令廃止が少なくとも関係していたと考えられているのである[17]。

ハーグのフランス大使ダヴォは、1685年にすでにフランスから2000万リーヴル以上の貨幣がオランダへ流入したと見積もっていた。60万リーヴルを持参したパリのワイン販売業者もおれば、100万リーヴルを持参した出版業者もいた[18]。このような貨幣の流入によって、貸付資本の値下げがもたらされた。リヨン出

15　Weiss, op.cit., II, pp.150-151.
16　Idid., pp.151-152.
17　Scoville, op.cit., p.300.
18　Ernest Jean Arnal, "De l'influence des réfugiés français aux Pays-Bas", *Bulletin de la Fondation Huguenote des Pays-Bas*, (Amsterdam,1986), p.231.

身のユグタン家は、アムステルダムにおいて出版業とともに大規模な銀行業を営んだ。とくにジャン=アンリ（Jean-Henri）・ユグタンは、フランドルにおけるグランド=ブルターニュ（Grande-Bretagne）の軍隊にきわめて多くの額を送金することによって、17世紀後半における最大の銀行家・金融業者の地位を築いたのである[19]。ユグタン家を始めとする数多くのユグノー銀行家、富裕者たちがオランダ、イギリス、アメリカ、ドイツなどへフランスの貨幣財産を持ち出した結果、その総額は約10億リーヴルともいわれている[20]。

オランダ在住のユグノーは国際規模において、とくにイギリス在住のユグノーと相互に連係を保ちあった。例えば、アムステルダムにはジレット・オベール（Gillette Aubert）、ヘンリー・ブロッケ（Henry Broquet）などのユグノーの家族が群居しており、彼らはロンドン在住のユグノー仲買人を通して各種の投資に係わりあっていた[21]。ハーグ在住のジェムズ・デロル（James Dayrolles）は仲買業を営み、その晩年には4000ポンドのイングランド銀行株式を保有した。彼は1739年に亡くなるまでそこに留まり、一家は1746年から1753年の間、イギリスへ移住した。そして、彼らは18世紀の末までイングランド銀行株式を保有していたのである[22]。ロッテルダムおいても時計屋であるアブラアム・フロマンティール（Abraham Fromanteel）は、イギリス投資に係わりあった[23]。オジエ（Augier）家もロッテルダムに居住し、イングランド銀行株式投資に関与していた[24]。

---

19 André-E.Sayons, "Le Financier Jean-Henri Huguetan à Amsterdam et à Genève", *Société d'histoire et d'archéologie de Genève*,(VI,1937), p.259.

20 *Bulletin de la société de l'histoire du protestantisme français*,(XXIX,1880), p.190; Scoville, op.cit., p.291.

21 仙田左千夫『18世紀イギリスの公債発行』啓文社、1992年、43～44ページ。

22 A.C.Carter, "The Huguenot Contribution to the Early Years of the Funded Debt, 1694-1714", *Proceedings of Huguenot Society of London*,(XIX, No.3, 1955), p.32.

23 Ibid., p.37.

24 Ibid., pp.37-38.

３．ユグノーの印刷・出版業

オランダがユグノー亡命者から引き出した多くの利益のなかに、彼らが提供した製紙業と印刷・出版業、そして、それらによってもたらされたあらゆる産業に及ぼした多大な影響を加えなければならないだろう。

オランダにおけるもっとも古い製紙工場は、1616年に定住したフランス人マルタン・オルジュ（Mrtin Orges）によって、オランダ東部の州ヘルダーラント（Gelderland,Gueldre）に設立されていた。しかし、オランダの印刷業者は、ナント勅令廃止以前は紙の白さや強さからしてフランスのアムベール（Ambert）、アングレーム（Angoulême）のものを好んだ。アングモワ（Angoumois）において500人もの労働者を雇用して、もっとも優れた工場の一つを管理していた2人のヴァンサン（Vincent）兄弟は、オランダに移住し、製紙業で完全な成功を収めた。このようにユグノー亡命の初期に設立された製紙工場は、かなりの数に及びんだ。そして、その労働者もフランスのあらゆる地域からかなり流失したので、数多くの労働者をイギリスに送る必要が生じた。ロンドンでポール・ドュパン（Paul Dupin）によって経営されていた大きな工場では、彼らのほとんどが雇用されるようになった。オランダで製造された紙は、ヨーロッパのほとんどの地域で需要を見い出すようになった。オランダの商人たちは長い間、良質な紙をオーストリアの低地地域（Pays--Bas autrichiens）、イギリス、フランス、スペインの一部地域、ポルトガルのほとんど地域に供給していた。オランダにおいては、まったくその紙のみが使用されていたのである[25]。

このような状況に対してフランス大使は、オランダの印刷業者がユグノー亡命者によって製造された紙を使用してフランスのものを排除しないかと心配する程であった。Archives Nationales（G7 1691 1692）によれば、フランスの貿易業者は1708年、ユグノーがオランダにおいて数多くの製紙工場を設立し、トランプ、上質の本、銅版画や印刷物の再生産に適切な質の高い紙を実にうま

25　Weiss, op. cit., II, pp.144-145.

く（only too well）模倣していた、という確信を持っていた。オーヴェルニュ（Auvergne）における製紙業に関する研究者ミシェル・コアンディー（Michel Cohendy, *Note sur la papeterie d'Auvergne antérieurement à 1790*, Clermont, 1862）によれば、オランダは最良の紙においてフランスより優れており、「1世紀以上」（for more than a century）も製紙業において事実上の独占を享受していたという[26]。

このようなユグノーの貢献は、直ちに実現することとなった。アムステルダの印刷業者は、オランダで発行される書籍のためにフランスの紙をもはや使用しなくなっただけではなく、フランス、イギリス、ドイツの著者のために多数の書籍を印刷していた。オランダの紙はきわめて安価で良質なので、著者や印刷業者はそれらを大いに好んだのである。数多くの労働者もまた、アムステルダムの印刷業において雇用され、オランダ経済の発展に貢献したのである。ザーン（Zaan）川流域に設立された工場は、フランスの最高のものと競合し、長い間オランダ工業のもっとも重要なものの一つとなっていた。18世紀のほとんど全般を通して、ユグノーの印刷業は、選帝侯の庇護の下で他の亡命者によって設立されたドイツのものとライバルとなっていた。ドイツの労働力が安価であったにもかかわらず、紙はアムステルダムよりもライプチヒのほうが高価であったので、アムステルダムの富裕な商人たちは、比較的小さな利益に満足し、長い間にわたって信用を得ることができたのであった[27]。

印刷・出版業は「連邦共和国」（Provinces-Unies）の誕生以来、法と自由の保護下でローラン・コストー（Laurent Coster）地域で繁栄していた。とくにライデンとアムステルダムの二都市は、数多くの有名な印刷業者や出版業者が存在していた。エルゼヴィール（Elzévirs）家とブラユ（Blaeuw）家は長い間、書籍販売の業績を向上させ、それに対応する印刷技術を、オランダで達成できる完璧なレベルまで押し上げた。印刷業は17世紀の後半には急速なスピードで衰退し始めたが、しかし、ユグノー亡命者によって再び活気を取り戻した。彼らによって、オランダの出版業は強力な刺激を受け、18世紀においてその影響

26　Scoville, op. cit., p.346.
27　Weiss, op. cit., II, p.146.

力はヨーロッパ全体に及んだ。彼らは、ヨーロッパ規模での書物と定期刊行物の販売網を創設した。それは、フランスでは禁止されていたプロテスタントの書籍を多数発行することから始まった。母国で沈黙が強いられていたフランスの著者たちは、自らの考えを普及させたのである。彼らが発行した書籍、定期刊行物、新聞はいたるところで熱心に読まれ、その普及が厳しく禁止されていたのも関わらず、フランスにさえ販売されるようになったのである。彼らは、フランスの警官を欺くため、印刷業者名、工場が設立された都市名を変更した。こうして書物は、ロッテルダムではピエール・マルトー（Pierre Marteau）の偽名の下でレニエ・レール（Reinier Leers）によって、アムステルダムではピエール・レブランク（Pierre Leblanc）の偽名の下でアブラアム・ボルフガンク（Abraham Wolfgang）によって刊行されたのであった[28]。

フランスの著者たち自身もしばしば、オランダの印刷業者に頼った。オランダに支配していた出版の自由によって、彼らの作品はより大きな価値を見出した。このようにして、ラ・フォンテーヌ（La Fontaine）は1685年にアムステルダムで『風流譚』（*Contes et Nouvelles*）を、ラ・メトリ（La Mettrie）は1745年にハーグで『魂の博物館』（*Histoire naturelle de l'âme*）を、1746年にアムステルダムで『マキアヴェリストの医師の政策』（*Politique du médecin de Machiavel*）を、1748年にライデンで『人間機械論』（*Homme-machine*）を刊行した。そして、この『人間機械論』の編集者であるエチエンヌ・リュザック（É tienne Luzac）は、『感情の自由に関する試論』（*Essai sur la liberté de produire ses sentiments*）において、その出版に対して自己弁護していたのであった。また、ルソー（Rousseau）の主著である『社会契約論』（*Contrat social*）、『新エロイーズ』（Nouvelle Héloïse）は、アムステルダムの出版業者ミシェル・レー（Michel Rey）によって、『エミール』（*Emile*）の初版は、ジャン・ネオルム（Jean Néaulme）によって1762年に刊行された[29]。

数多くの重要な出版社がユグノー亡命者やその末裔によって創立された。

28　Idid., pp.146-148.

29　Idid., p.148.

シャルモ（Chalmot）、ネオルム（Néaulme）、デスボルドゥ（Desbordes）、シャンギオン（Changuion）、リュザック（Luzac）兄弟、レー（Rey）、マルシャン（Marchand）は、ハーグ、ライデン、アムステルダムの出版業において長い間にわたってリーダ格であった。ヨーロッパにおける出版社の最初の例として、リヨン出身のユグタン（Huguetan）家のものを挙げることができる。この一家の長は、3人の息子とともにアムステルダムに定着し、以前から存在していたもののなかでもっとも広範囲にわたる書籍販売網を創造した。この巨大な取引における最大の発展は、モントフェラー（Montferrat）の末っ子、ピエール（Pierre）・ユグタンの勤勉と賢明さによってもたらされた。この一家によって販売された書籍のほとんどは、印刷業者として、そしてデザイナーや彫版師としても有名なベルナール・ピカール（Bernard Picart）の印刷所で作られた。ベルナールは、1672年にパリで生まれ、熱烈なプロテスタントの信者である父、エチエンヌ（Étienne）・ピカールとともにナント勅令廃止以降にフランスを去った。彼は、最初のうちは新たな書籍に版画を入れるために雇用されていたが、彼の非常に美しいデザインにより、オランダの出版業において名声を博すようになったのである[30]。

以上のように、オランダの印刷・出版業におけるユグノーの及ぼした影響により、オランダとフランス、イギリス、ドイツにおける知識層との交流が増大し、そしてその取引への新たな販路が開拓された。また、その影響によってオランダ国内でも、その時まで無知で生活していた庶民社会全般に知識が普及していった。これらの知識により、公の道徳水準が高まることとなった。オランダの物質的繁栄も、同じように印刷・出版業によってもたらされたのである。このように、ユグノー亡命者によって、文学者たちが裕福であり続けただけでなく、数多くの校正者、活字鋳造者、製本屋、デザイナー、彫版師、そして革や羊皮紙の製造業者もその恩恵を受けたのであった[31]。

30　Idid., pp.149-150.
31　Idid., p.150.

４．ピエール・ベールと「文芸共和国」

オランダにおけるユグノーの印刷・出版業という経済的背景の下、ユグノー亡命者は、歴史的にみて第２のヨーロッパ統合といわれている「文芸共和国」（「文芸」に対する崇拝で結ばれ、すでに16世紀初頭から独自性を自覚した人々によってヨーロッパ各国に普及し、その共通語はラテン語である）に基盤を与え、フランス語をヨーロッパのエリートの国際語にしたのである。彼らのなかで、ロッテルダムに亡命地を求めたピエール・ベールは、フランス語の「文芸共和国」においてきわめて大きな役割を果たした。そして、彼が1697年にアムステルダムで出版した『歴史批評事典』（*Dictionnaire historique et critique*）は、宗教的寛容に関する著作なかでももっとも急進的なものであった[32]。

確かに、「文芸共和国」は、現実のいかなる社会にも呼応してはいなく、理想であった。とはいえ、この理想を信じる人々には、国家を超え宗派を超越した共同体、知的活動のかたちとしてのヨーロッパに所属するという感覚が与えられた。それと同時に、個々の人々が相互の関係において従ってゆくべき倫理の基礎も据えられたという。例えば、カトリック教徒でありながら、論争や改宗を目的とはせずに、カルバン派の信徒とさえ文通をするのは、「文芸共和国」の一員として、もう一人の「文芸共和国」の成員と交流を持っているがゆえである。「文芸共和国」ではまた、宗教に対する政治の自律性が主張された。マキアヴェリ的な手法が国家間の関係ならびに国家と国民の関係に応用された。ピエール・ベールの主張に代表されるように、「文芸共和国」のおける体勢の主張は、マキアヴェリの教えに従い、閣下は宗教に奉仕してはならず、国家の第一の役割は、国民の平和を保障することにあった[33]。

一方、ラテン語の「文芸共和国」によって開始された、新たな自然研究は、

32　ポミアン前掲書、108～110ページ、デレック・ヒーター著、田中俊郎監訳『統一ヨーロッパへの道』岩波書店、1994年、68ページ。

33　同書、111～114ページ。

フランス語の「文芸共和国」によって引き継がれ、深化させられた。とくにデカルト、ライプニッツ、ニュートンらが、それぞれの分野でそれまで通用していたアリストテレスとプトレマイオスと決別し、新しい物理学と新しい天文学に専門用語を与えることになった。17世紀初頭から18世紀末における、この諸々の新しい科学の形成期ほど、知的活動が国際的だった時代はなかった。歴史研究においても、プロテスタントがカトリックと協力し、たとえ戦争中であってもイングランド、フランス、オランダの間で史料が交換されるようになった。このようなヨーロッパ規模の事業であったため、「文芸共和国」は、それへの帰属感とその規範の尊重とによって、ある同意の場は作られることができた[34]。

フランスの改革派、哲学者として知られるピエール・ベールは1647年11月18日、南フランスのル・カルラでプロテスタント（カルヴァン派）の牧師の息子として生まれ、洗礼時にピエールという名を付けられた。父親ジャンはモントバーン出身の良家の出で、母親ジャンはデュカス家の出身の名家に属していた[35]。トゥールーズの学院で学び、1669年に一度カトリックに改宗するが、翌年プロテスタントへの再改宗を経験した。そのため迫害にあい、スイスのジュネーヴに逃れ、プロテスタント大学のジュネーブ大学で学ぶ。ここでは、デカルト哲学にも触れる。以後フランスに戻り、1675年からスダンのプロテスタント大学の哲学教授となる。同僚に牧師兼神学教授のピエール・ジュリューがいた。しかしプロテスタントへの宗教迫害により1681年に大学が強制閉鎖され、オランダのロッテルダムに亡命する。1693年まで、同市の高等教育機関で哲学と宗教を教える。ジュリューも同機関の神学教授兼フランス語教会の牧師となった。

ピエール・ベールは以後旺盛な文筆活動を開始し、1682年に『彗星に関する手紙』、翌年に増補改訂版として『彗星雑考』を匿名で刊行、注目を浴び

34　同書、114～117ページ。

35　ピエール・デ・メゾー著、野沢協訳『ピエール・ベール伝』（*La Vie de Mr. Bayle*, 1730）法政大学出版局、2005年、9ページ。なお、ピエール・ベール伝については、『世界文学大事典４』（集英社、1997年、15～16ページ）、『岩波 哲学・思想事典』（岩波書店、1998年、1453ページ）なども参考にした。

る。この書は、彗星の出現に関する迷信を批判して道徳の宗教からの自立性を説く、新趣向の反カトリック論争書として、無神論者の社会も存立可能であると強く主張した。1684年春から1687年冬にかけ、月刊誌『文芸共和国便り』(*Nouvelles de la république des lettres*) を刊行した。改革派の壊滅をもたらした、1685年のナント勅令廃止（フォンテーヌブローの勅令）直後に『〈強いて入らしめよ〉というイエス・キリストの御言葉に関する哲学的注解』を刊行し、新教徒迫害に対して良心の自由と宗教的寛容を訴える。各人の良心は人に神の声を伝える座である以上、良心に服従するのが人間の義務であり、世俗君主はそこに干渉する権利を持たない。これは王権に寛容を請願して改革派を再び合法化させることにあったが、年来の同僚であったピエール・ジュリューら王権打倒を唱える強硬派の方針（国内残留信徒の抵抗および新教諸国の圧力によってフランス王権を打倒し、改革派を復興させる方針）と対立、論争の末、1693年にロッテルダムの教職を追われることになる。

しかし、この追放ににによってピエール・ベールは、かねてから計画を温めていた執筆活動に専念することができ、1696年に大作『歴史批評辞典』を刊行するに至るのである。伝記、書誌の集成という体裁を取る『歴史批評辞典』は、これまでの彼の一貫した姿勢であった、驚異的な博識と卓抜な批判精神をもとに、従来の歴史辞典の誤記や不正確を正し、なおかつ既存の硬化した哲学体系、宗教体系に対する痛烈な批判と皮肉を込めた作品であった。この大作は、啓蒙思想の形成に多大な刺激を与えることとなった。ベールは晩年、『歴史批評辞典』において「神と悪の存在」を追求し、善悪二元論や人間理性の脆さを確認し、信仰至上主義へ至る。これがフランス語教会における何人かの神学者の理論的傾向と対立し、彼らとの論争がここから始まっていく。晩年の著作『ある田舎者の質問に対する回答』、『彗星雑考続編』、未完の遺作『マクシムとテミストの対話』では、この論争が多くを占める。

このようにピエール・ベールは、改革派の知的伝統のなかでカトリック、ピエール・ジュリューらの改革派強硬派、理論的神学者たちとの論争を通して、自らの思索を鍛え上げていった哲学者であった。18世紀以来伝統的に神学・形而上学の解体を目指した批判的懐疑論者としてみられてきたが、ベール研究が

進んだ1960年代以降は、カルヴァン派の伝統的信仰に立脚する個性的なプロテスタント思想家という見方が研究家の間では有力になっている。1706年にロッテルダムにて客死した。

とくに、ピエール・ベールがロッテルダムにおいて刊行した『文芸共和国便り』は、全西欧的な名声を得、論評の公平さ、質の高さ、ユーモアに富んだ文体で広範な読者を得た。これを筆頭して、オランダのユグノー亡命者の刊行物などが「文芸共和国」に貢献するようになった。そして、「文芸共和国」は「ヨーロッパの文化的統一の体現であると自己を規定し、その統一を維持し、絶え間ない戦争と宗教をめぐる暴力の時代に、ヨーロッパ統一の発現と内容を革新してきた」[36]のである。

ピエール・ベールは1684年３月21日、『文芸共和国便り』の仕事にかかわった。そして、４月４日にはアンリ・デボルトと印刷について取り決めをし、３月号から月刊で出すことにした[37]。アンリ・デボルトは、アムステルダムにいたユグノーの出版業者であった。父のイザーク・デボルトは、フランスのソーミュールで書店と印刷屋を開いていたプロテスタントであった。アンリ・デボルトはその長男で、1678年から父の仕事を手伝った。1682年に一家はアムステルダムに亡命し、オランダにおけるフランス語図書出版で重要な役割を果たした。ベールが編集した『デカルト氏の哲学をめぐるいくつかの興味ある文章の集成』もアンリ・デボルト書店から出ていたが、この書店の名をもっとも有名にしたのが『文芸共和国便り』であった。アンリ・デボルトはベールが編集を手放したあともその刊行を続け、1708年５月号まで出した[38]。

『文芸共和国便り』の各号は、２つの部分に分かれ、第一の部分には本の詳細な抜粋、第二の部分には多少の指摘を伴った新刊書の目録が収められ、より多くの本を話題にしたのであった。抜粋には飾りとして、著者の伝記、作品、論争などをめぐる面白く興味深い多くの指摘や、精妙でデリケートな幾多の考察を伏した。学者のためだけに仕事をするのでなく、世俗人に喜ばれ役立つこ

36　ポミアン前掲書、120ページ。
37　メゾー前掲書、52ページ。
38　同書、390ページ。

とも狙っていた。この本はあまねく好評だった。ピエール・ベールはフランスでも禁止されまいと期待していたが、それでもやはり禁止された。しかし、禁令にもかかわらず毎月多くの部数がフランスへ持ち込まれ、みな先を争って読んだのであった[39]。

『文芸共和国便り』の二年目に当たる1685年の三月号から、ピエール・ベールは「ロッテルダムの哲学と歴史の教授B・・・氏著」など、表題に加筆して、この本を匿名書にはしなかった。この号には「お知らせ」を付けて、ロッテルダムの為政者が文芸を保護していること、新設の「市立大学」に彼らが置いた教授の一人がこの書の著者であることをみてもらうためであると言い、全編を彼らに捧げることに変わりないと言明した。三月号のある記事では、ロッテルダム市が昔から文芸を奨励してきたことを述べる某書の抜粋を掲げつつ、この『文芸共和国便り』から世の人が何らかの教えや有益な骨休みを得られるなら、それは彼らのお陰げであると、ベールは付言したのである[40]。

ピエール・ベールは、フランスでの改革派迫害にかねがね心を痛め、この点について、『文芸共和国便り』でたびたび非常に賢明で控えめな考察をしていた。彼は、1685年10月に、ナント勅令が廃止され、改革派の家々に竜騎兵が差し向けられて、ローマの宗教へ家人を無理やり改宗させるため、宿泊する兵隊（プロテスタントが「ドラゴナード」と呼んでいた）がありとあらゆる乱暴狼籍をはたらいていると聞いて胸を締め付けられていたのであった。だがとうとう、1686年３月に『ルイ大王のもと、カトリック一色のフランスとは何か』という題の小冊子を発表した。しかし、ベール自身が作者だという疑いすら起こらぬように、この本は「サン＝トメール」（フランス最北部の町）で印刷されたと偽り、原稿はイギリスから戻ったばかりの宣教師に託された。この小品では、改革派に対するフランスのやり方、フランスのカトリック教徒全員がもれなく非常に強い、非常に苦々しい口調で批判されていた[41]。

39　同書、52～53ページ。
40　同書、58～59ページ。
41　同書、64～65ページ。

『文芸共和国便り』のお陰で、いくつかの論争に巻き込まれたものの、ピエール・ベールは個人のみならず幾多の高名な団体からも尊敬を克ち得た。アカデミー・フランセーズは、ベールの功績とこの新聞の有益さを万民の認めるところと高く評価した。イギリスの王立協会も、ベールがこの『便り』ですばらしい才能を発揮していることを評価し、ベールと「継続的で確実な文通」をしたいと申し入れていた。ダブリン協会（学芸の進歩を図るために集まった学者・好事家の会）からもとても鄭重な手紙を受け取っていたのである[42]。

5．おわりに

以上みたように、ユグノーはオランダ経済、とくに印刷・出版業の発展に大きく貢献するとともに、その経済的背景の下で、とくにピエール・ベールが「第二のヨーロッパの統合」といわれている、「文芸共和国」のなかできわめて大きな役割を果たしたのである。

ユグノー亡命者はオランダの経済発展に大きな役割を果たしたといえる。この点では、イギリス、ドイツ、アメリカなどにおいて果たしたユグノーの役割と基本的には同じである。ユグノーが、とくに織物工業、印刷・出版業などの製造業を新たに移植するか改良することによって、オランダにおけるほとんどの諸都市は多くの利益を受けたのであった。商業・金融分野においてまた、オランダは依然としてその国際的中心地でありつづけ、この領域でユグノーは、ユダヤ人とともに、もっとも大きく、長期間にわたって影響力を行使したのであった。これらの点については、ダヴィド・ヴァン・リンデンの最近の研究成果によって、ロッテルダムにおいても実証されている。

とくに、製紙業やそれと密接な関連を持った印刷・出版業において、オランダはユグノー亡命者によって大きな利益を受けた。オランダの印刷業者は、ナント勅令廃止以前は紙の白さや強さからしてフランスのアムベール、アング

42　同書、73ページ。

レームのものを好んだ。ユグノーによってオランダで製造された紙は、ヨーロッパのほとんどの地域で需要を見出すようになった。事実、アムステルダの印刷業者は、オランダで発行される書籍のためにフランスの紙をもはや使用しなくなっただけではなく、フランス、イギリス、ドイツの著者のために多数の書籍を印刷していた。オランダの紙はきわめて安価で良質なので、著者や印刷業者はそれらを大いに好んだのである。そして、18世紀においてその影響力はヨーロッパ全体に及んだ。ユグノー亡命者たちは、ヨーロッパ規模での書物と定期刊行物の販売網を創設したのであった。

このようなユグノーの印刷・出版業のお陰で、ユグノー亡命者は、「文芸共和国」に基盤を与え、フランス語をヨーロッパのエリートの国際語にしたのである。彼らのなかで、とくにピエール・ベールが演じた役割は、きわめて大きかった。彼がロッテルダムにおいて刊行した、月刊誌『文芸共和国便り』を筆頭して、オランダのユグノー亡命者の刊行物などが「文芸共和国」に貢献したのであった。それによって、「文芸共和国」はヨーロッパの文化的統一の体現であると自己を規定し、その統一を維持し、ヨーロッパ統一の発現と内容を革新してきたのである。

オランダへの亡命ユグノー、とくにピエール・ベールが「文芸共和国」において果たした役割、彼が刊行した『文芸共和国便り』が「文芸共和国」においてなした貢献に関しては、さらなる具体的な実証が必要になるだろう。この点については、今後の課題にしたい。